

審査要旨

本論文は、16世紀から17世紀にかけて東アナトリアがいかにしてオスマン帝国により征服され、オスマン支配が定着していったかについて、トルコ語・ペルシア語・アラビア語の記述史料および膨大な量のオスマン語の未刊文書史料の博搜に基づいて解明した研究である。

東アナトリアは、アジアとヨーロッパの交通の要衝に位置し、古来地政学的に最も重要な地域の一つであった。この地域は、オスマン帝国による征服後、20世紀初頭に至るまでオスマン支配下に留まった。この地域は、その重要性にも関わらず、史料上の諸困難があり、従来、本邦はもとより周辺諸国においても欧米諸国においても十分な研究が行われてこなかった。とりわけ、四世紀にわたる安定的支配を実現したオスマン帝国によるこの地域の征服と支配体制の定着の過程については詳細な実証的研究に乏しい。本研究はその欠缺を埋める労作である。

本論文の第一章においては、研究史の紹介に続き、従来、十分用いられてこなかった文書史料類の各々の性格について詳細な解説が行われる。第二章においては、16世紀におけるオスマン帝国による征服過程について、ディヤルバクル地方とヴァン地方の征服の二段階にわけ詳細に検討している。第三章においては、オスマン支配定着過程の分析に入り、地方行政組織の形成と上級地方官の任免の様態につき未刊文書史料を博搜して詳細に分析している。第四章においては、オスマン朝の地方支配体制の根底をなすティマール制が東アナトリアにおいていかにして定着し地域的偏差を生み出したかを明らかにしている。ここでこの地域に特徴的なティマールの類型についてまったく新しい見解を提示することに成功している。第五章においては、このティマール制下の土地に関わる権利の配分の様態とその特色を明らかにしている。第六章においては、東アナトリア社会の構造に立ち入り、アミール権力と部族の内部構造と東アナトリアの人口構成と社会構造の一端を明らかとした。

本論文は、当該テーマについて、記述史料のみならず、未刊の膨大な文書史料の博搜に基づいた画期的な論文といえる。まず第一に、オスマン朝による同地方の征服過程を同地域の内部構造と絡めつつ解明した点は重要である。第二に、オスマン支配体制の定着過程を地方行政組織・その基礎としてのティマール制の特性・ティマール制を通じての権利配分の実態について史料の実証的

析に基づきつつ新知見を提示した点において極めて高い評価に値する。第三に、同地域の社会構造の分析も新しい取り組みとして評価に値する。

ただ、本研究にも若干の欠点はある。第一に、膨大な史料を利用しながらヴィヴィッドな歴史記述に必ずしも成功していない点が挙げられる。第二に、社会史的分析においてなお未完成な部分が散見される。第三に、東アナトリアのケースとオスマン体制一般との対比分析においてなお不十分な点が見られる。

しかしながら、全体として、当該分野においては国際水準に達する貴重な学術的貢献であり、博士(文学)の学位を授与するに十分に値すると認められる。